

「ささえ」

2017年1月発行 情報誌 第58号

発行 NPO福祉用具ネット事務局

住所: 福岡県田川市伊田 4395 (福岡県立大学内)

TEL/FAX: 0947-42-2286

E-mail npo-fukusiyounet@sage.ocn.ne.jp

新 URL <http://npofukusiyougu.sakura.ne.jp>

情報誌「ささえ」は年4回(1月・4月・7月・10月)発行しています。

印刷 よしみ工産(株) 北九州市戸畑区天神1丁目13-5

福祉用具はあなたの自立をささえます。

あなたのささえがNPO福祉用具ネットを元気にします。

【商品名】自動排泄処理装置
尿吸引ロボ「ヒューマニー」



夜ぐっすり眠れるから
屋間頑張れる!



【発売元】大和ハウス工業(株)

ヒューマニーの上手な使い方は、本NPOのホームページに詳しく掲載しています。

洗髪シャワー



NPO福祉用具ネット開発品第1号

【製造元】

(株)福祉SDグループ

平成27年より、充電式も発売開始。【発売元】キヨタ(株)

**NPO福祉用具ネットが関わった
主な開発品**



アルファブラ
ソラ クッション



特定非営利活動法人
NPO福祉用具ネット

「大切な芽を皆さんのやさしさに包まれながら育てていきたい…」

「西日本国際福祉機器展について」

福祉用具研究会代表 中村 晋介

(福岡県立大学 准教授/NPO 福祉用具ネット理事)

皆様はお気づきになられていますでしょうか。西日本国際福祉機器展では、NPO 福祉用具ネットのブースの一角に、福岡県立大学福祉用具研究会（以下、福祉用具研究会と略）のコーナーがございました。福祉用具研究会の歴史と理念、これまでの活動内容と今後の方針について述べた上で、次年度からの新会員募集についての案内、福祉用具研究会とNPO 福祉用具ネットとの関係などを、A0判2～3枚のポスターにまとめて掲示しております（手持ちパンフレットも作っていた時代もありましたが、現在は作っておりません）。福祉用具研究会代表／NPO 福祉用具ネット理事の立場から、私はこのポスターを毎年作成してきました。

会場で観察している限り、あのポスターの前で立ち止まってくださる方がそこそこおられます。しかし、極めて残念であります、「西日本国際福祉機器展に貼られていたポスターを見て、福祉用具研究会／NPO 福祉用具ネットを知りました」「研究会やNPOの会員になることを決めました」とおっしゃる方には、まだ1人もお会いしておりません。

もし、本誌を手にとっておられる方の中で、該当する方がおられましたら、ぜひ名乗り出てくださいたいと存じます。来年度以降のポスター作りのモチベーションも上がります。長年NPO 福祉用具ネットの会員を続けておられる方にもお願いがあります。国際福祉機器展にご来場の折には、セミナーの聴講や、各企業ブースを見て回るついでの時間でかまいません。ぜひ私ども福祉用具研究会のコーナーにお立ち寄りくださり、可能であればご感想をいただきたいと存じます。感想はNPO 福祉用具ネットのメールアドレスやFAX番号までお寄せください。毎年がんばって作っておりますので、よろしく願いいたします。

さて、私も長年、西日本国際福祉機器展に関わって参りました。ここで気がついたのは、最近の福祉機器展の展示物が、車いすやベッド、ポータブルトイレ、リフトといった、従来型の「福祉用具」にとどまらなくなってきたことです。話相手をしてくれるロボット、歩行練習を手助けするロボット、ボタン1つで車いすを収容できる自動車（しかも電気自動車）、自動的に部屋の温度や湿度を管理するのみならず、換

気までやってくれる住宅、会話を支援するタッチパネル、スマートフォンと連動して、離れた所に住む家族の状況を逐一知ることができるシステム、排泄を自動検知して尿を吸引する道具、体圧を自動で測定・計算して、最適な硬さを作り出すマットレス……15年前、10年前には陰も形も存在しなかった、新しい福祉用具です。少なくともハードウェアの面において、「未来」は確かに近づいてきているのです。

このような時代の転換点において重要なのは、1)「未来」が近づいている現状の認識、2)「未来の技術」を使いこなす人材の必要性に関する認識、の2点でしょう。一般の人びとは1)だけで良いかも知れませんが、しかし介護や医療の現場に携わっている人びとにとって、むしろ重要なのは2)の認識でしょう。ハードウェアができて使いこなす人材がいなければ「未来」は「灰色の未来」です。このような未来を到来させてはいけません。

事実、西日本国際福祉機器展は、「福祉機器展」と名乗りつつも、単に福祉機器／福祉用具の展示だけを行っているわけではありません。これと平行して、会場ではさまざまな講演会やセミナーが行われています。単に機器展に行って、展示されている各種機器を試用したり、カタログや記念品をもらうだけでは、1)の認識しか強化されません。本誌をお読みになっている方のほとんどは、介護や医療の現場で活躍されている方々のはずです。ぜひ、来年度の展示会では、会場で開催されている講演会やセミナーを1つでも多くお聴きになり、2)の認識を高めていただきたいと思います。今年の福祉機器展パンフレットも、1)記念講演会の案内、2)各種講演会・セミナーの案内がまず書かれて、最後に出展企業／出展品の紹介となっています。国際福祉機器展の事務局も、講演会やセミナーを重視していることの証左でしょう。

もちろん、1回の講演会やセミナーで、最新の機器／用具の使い方を詳しく知ることは困難でしょう。その時は、NPO 福祉用具ネット事務局にお問い合わせください。さらなる知識を得るにはどこに／誰に相談すれば良いのか、きっと懇切丁寧に教えてくれることでしょう。

心と心を繋ぐ新しい形 “今” から始まる戦い ②

～ “ここにいるよ” を実践し続ける意味とは？～

(所属)NPO 福祉用具ネット監事 (株)cocotama) 氏名 佐々木 寿生

今回4回シリーズの第2弾として、お話を進めさせて頂くが、前回、話が途中で終わったことを心からお詫び申し上げる。

そして、第1弾の最後に私が申し上げたかったことから話を続けさせて頂く事をご容赦頂きたい。

今回、有り難いことに4回程度連載をさせて頂ける予定になっていることから、わたしは自身のうつ病や沢山の組織との関わりの中で思う私たちのあり方、対応などについて紹介し、私たちがどう考え、どう表現し、そしてどこへたどり着いたかについて御紹介をしていきたいと考えている。

特に私自身が心の病気になる人をどうしたら減らせるのかという難問に苦しんでいるとき、自分も苦しい中で妻が作ってくれた心の卵のロゴに忍ばせていた“ここにいるよ”という言葉は、私に衝撃を与え、感動させ、これを実現するために今、私たちが事業としているサービスへ辿り着いた過程について述べていきたいと思う。

私のように学識も表現力にも乏しいものが、どこまでお伝えできるかは分からないが、最後までお付き合い頂き、読者の皆様が自分の置かれた立場、役割の中で、何かを感じ、思い、行動へ繋がっていただけることを願いつつ、私の物語を始めて行きたいと思う。

このだるさ、きつさ、私は病気なのか？

やはり、私にとっての大きな転機となったところから私の物語を始めていきたいと思う。

まだ私が某国立大学の職員をしている頃のことである。身分は文部科学事務官というお堅い身分を持っていたが、いわゆる事務屋さんである。

国家公務員試験行政Ⅱ種という試験に合格し、29歳から主に会計系で12年ほど過ごしてきたときだった。

その2年前、人事交流という名目で他県の国立大学会計課で2年を過ごし、期間を終え帰ってくる際、私は学生系の業務を希望していた。

理由としては、今後、大学は公務員枠から外れることが確定しており、私たちの身分も国家公務員から独立行政職員に変わり、しかも以降の身分保障があいまいな非公務員型というものに置き換えられることとなっていた。

国としてはJRやNTTを教訓に紛争を起こさず民営化するための緩やかな首切りを敢行したと私は思っている。

今後、徐々にではあるが、人気や特徴のない国立大学は運営ができなくなり消えていくことになるだろう。

その証拠に、国は国立大学法人に交付している運営費交付金を1%ずつ毎年削るという暴挙に出ており、大学はそれを埋めるために自分で稼げという具合に変わってきた。

1%と言えばそんなに大きな額ではないように思えるかもしれないが、中規模程度の大学が年間で使用する額は100億近く、つまり毎年1億ずつ減らすと知っているのと同じことになる。

中小企業で言えば、すさまじい売上減少であり、すぐに潰れてもおかしくない額である。

今後大学はその問題を抱えながら、有名私立大学とも戦って減少する学生を獲得していかなければならない。

私はその中で、今後最も重要となってくると思われる学生系の仕事を経験しておくつもりで希望を出していた。

そして、私が異動して帰って来た場所は、学部の学務係というところであり、大学でも他の部署に比べて最も業務がハードといわれるところだった。

しかも、新米係長であるにも関わらず、部下が8名もいる部署で、事務局ではいくつもの係に分かれている業務を1つの係でまとめているようなところで、学務系の仕事を初めて行う私にとって、普通にこの係で使用されている言語自体、聞いたことのない外国語のように聞こえ、意味不明であり、なにをどうしていいのか、また、その根拠となるものさえ分からず、前係長からの引継ぎは当然行われたが、「必要なものはここに全てあるから」と10分で終わった。

一応、ベテランの主任が2名私の下についたが、2人のうち1人は私より10歳年上、もう1人は2歳年上の主任であり、後から聞いて分かったことだが、問題児2名の持っていくところに苦慮していたところに私が希望を出したので、「佐々木だったら大丈夫だろう」ということだったらしい。

事務局より所用で学部を訪れた友人が憐みの目で見ながら教えてくれたことだ。

それでも何も分からない私には2人の主任に頼りながら仕事を前に進めていくしか手段がなく、教えるを請いながら進めていたが、1人の主任は自分の業務と自分が行うとした業務以外は全て拒否され、特

に上から降ってくるイレギュラーな業務を振ろうものならいきり立ち、「それをおれにさせるなら、他の業務もおれはやらん！お前がやれ！」という性格であり、もう1人は自分のやり方にそぐわない方法で業務を行うと、見境なく怒鳴り散らす始末である。

もちろん仲も悪く、2人をまとめようと3人での話し合いなど幾度となくお願いをし、話し合いを行うが、その時は了承するものの全く協調することもなく、私の係は崩壊寸前、いや崩壊していたと思う。

それでも当時、教職免許に「情報」という免許ができたことで、先生方から現在取得できる「数学」と「理科」の免許を「数学」と「情報」に変更したいとの話があり、そのため教職科目の作成や文部科学省との交渉を月に30ほどある会議をこなしながら、東京へ行き来を繰り返し、必死で行うことで、何とか1年は過ごすことができた。

そして、3月に教職免許の許可が出、4月に入り、係内を見渡すと私の味方は誰一人いない状態に陥っていた。係員は私の指示に従うことはなく、上から降ってくる仕事は全て自らが抱え込みながら孤立無援の中で仕事をする。その状態で3カ月が過ぎようとしていた頃から、自分がおかしいことに気付いた。

朝、起きれば泥沼から這い出すような脱力感に襲われ、体を引きずるように起こし、仕事に行っても2時間も業務を行えば、自分の制御ができないほどのだるさに襲われ、勤務時間を乗り切るのが精一杯の状態であり、夜は寝付けず、いつまでも起きているか、眠っているのか分からない状態で、3カ月間で20kgも太るという異常な状態になっていた。

そして何より、仕事に向かい職場が近づくだけで心臓の鼓動が耳に届くほど打ち鳴らされ、自分が死ぬ恐怖に何度も襲われる。

8月下旬、このままでは自分の精神が崩壊すると思い、家族に今の状態を説明し、了解を得て辞表を9月初旬に事務長室へ持っていき叩きつけ、「あなたがたは、私に何を求めたのか！」と怒鳴り上げたことだけは今でも鮮明に覚えているエピソードである。

そして次の日、10月1日付で異動命令が出た。

私は偶然によって助けられたのだと今でも思う。

もし異動した先が今の状況と大差なければ、そのまま精神が崩壊していてもおかしくなく、自分が意識せずとも自殺という可能性もあったと思う。

しかし、私が異動した先は学生部学生生活課サークル担当の専門職員（係員のいない係長）であり、出勤した初日、課長から呼び出され、課長補佐と共に私へ告げられたのは「佐々木さんのやりたいように業務を行ってもらって構わない。後のフォローは私たちがやるから」というものであり、その言葉通り、課長や課長補佐は私を守り、私が通常の状態であればこなせる業務であっても、今の状態ではほと

んどこなせない業務は全て2人が代わって行ってくれ、それを私の精神的な負担とならず、ごく自然に行ってもらえる環境を作り出してくれた。

当時の私は、出勤はするものの2時間と保てず、勤務時間にそこに存在していることが精一杯の状態であり、また、私が任されている業務自体は、3年前からポストが空いたままであり、どのくらいのサークルが存在するのかさえ分からず、1から全てを作っていたいかならない状態だった。

その中、必死で今ある情報をかき集め、少しずつサークルの全容を掴んでいき、既に自治会は崩壊、体育会、文化会は存在するものの、文化会長はその機能を失って、部費を各サークルに配分する力すら失っていた。

私は、自分の精神がギリギリの状態の中で文化会の立て直しに着手することからはじめた。

まず、文化会に属する部長を呼び出し、文化会の必要性について確認を行い、全員が必要との意見を得たところから、文化会へ各部において将来を担う優秀な人材を1名選出すること、あまり必要を感じないような人材を出せば、また、同様の現象が起き文化会が力を失うことになることなどを伝え、1週間後にその人材を連れて出席することを約束させた。

もともと10年ほど塾の講師を行っていた経験から、この年齢の学生の心を掴むのは上手なようで、自分にこんな力があつたことに自分自身驚き、前職で全ての自信を失っていた私にとって、少し自信を取り戻す機会となると同時に、自分の持つ特徴について見直す機会ともなった。

私は、課長、課長補佐の支援を受けながら、文化会の立て直し、体育会の体制の見直しなど学生に関わり、私のような何の実力もない人間を慕い、頼ってくれる学生たちとの出会いの中で救われ、少しずつ精神力を取り戻していった。

それでも通常の勤務時間内でフルに精神が続くようになるまで半年、自分を取り戻し、先に対する意欲的な行動を起こせるようになるまで2年を要した。

そして、この経験の中で、1つの疑問が私の中に浮かんできていた。「なぜ、組織になると人はこんなにいがみ合い対立するのか？」私をいじめたものも含め、業務に関係のないところではごく普通であり、いろいろな会話を交わし、楽しい時間を過ごすことができる。しかし、ここに組織があり、業務が発生すると途端に自分の力を誇示し、小さなコミュニティ内でさえ勢力争いを始める。

私はこの答えを心理学に求めた。次回、心理学を学びながらの私の気づきや、その後の行動について話していこうと思う。つたない文章で申し訳ないが最後までお付き合い頂ければ幸いです。

「がんサバイバーの生活と療養」②

がんサバイバーの集いの場「独立型サロン」

熊本学園大学大学院博士後期課程 高松美樹

前回、若き母親であるがんサバイバーのAさんのことを書きました。今回は、引き続きがんサバイバーの方々がどこに集い、それはどのような意味があるのかということに焦点を当てたいと思います。

がんサバイバーとは、どういう人なのか？これは前回、述べています。がんサバイバーとは「がん」と診断された人、また、「がん」と告知されて数年経過している人、また治療を終えた人も含みます。

がんサロンは「院内サロン」？

さて、がんサロンについて、皆さんはどのくらいご存知でしょうか。

熊本県内にはがんサロンが20数か所あります。短期間で県内各地に次々と誕生し、地域色を生かしながらそれぞれの活動を行っています。このがんサロン設置の背景には、厚生労働省からの「通知」もあって、それぞれの拠点病院にがんサロンが誕生してきました。その拠点病院とは、都道府県の選定した、がん治療における高度な診療を特色とする病院です。

私は昨年まで大学院の修士課程に在籍しており、論文執筆の調査のために地元熊本県のがんサロンに1年半をかけて、機会を得て調査に入りました。私が調査した限りでは、熊本県の多くのがんサロンは拠点病院の中に開設されています。私はがんサバイバー及び、がんサロンの活動に参加し始めました。次第にわかったことは、運営は患者が主体のようにも見えますが、実は病院でありサロンの進行役は看護師あるいはMSW(医療ソーシャルワーカー)ということでした。

ちなみに、熊本県には県内のがんサロンをつなぐ、「がんサロンネットワーク熊本」が設立されています。その「目的」を以下に紹介します。

- (1)がんサロンの運営やがんについての情報交換
- (2)がん治療やがん予防対策についての意見交換
- (3)がん検診率の向上などの社会啓発活動
- (4)がんサロンの運営やがんについての研修活動
- (5)がんの啓発について他の団体との連携した活動
- (6)新しいがんサロンの開設を支援する活動

がんサロンの現状をつかむためにも、本格的な調査が必要であると痛感しました。そこで、あるがんサロンの責任者に調査協力を依頼しましたが、その回答は基本的に拒否でした。さらに指示があり、がんサロンの出入りは許すが、ここで話されたことは外に持ち出さないでほしいということでした。私の調

査は、これで出来ないのかと落胆し、大学院に戻りました。私が調査しようとしていた、がんサロンとは、そもそも何だろうと振り返る機会を得ました。大学院の演習で報告した要点は以下の2つです。

- ① がんサロンの雰囲気は和やかなものの、参加しているがんサバイバーの中には、医療関係者に診察時に聞けなかったこと、特に副作用、薬について等の、病気の相談をする人も見られる。
- ② がんサロンは、がんサバイバーが、がんの病気のことや、生活等の共通の話題を通じて気持ちを表出できる場であり、また励ましあい、そして元気を取り戻す場である。

がんサバイバーは生活者でもある

がんサバイバーにとっては、がんサロンは医療の延長上と理解されているように思えます。院内に置かれたがんサロンは、以下「院内サロン」と呼ぶことにします。

熊本のがんサロンでの調査ができないことに気づき、やや失望した私は、がんサロンは「院内サロン」だけなのか？とインターネットで探す毎日でした。調べていくうちに、がんサロンの発祥の地が島根県である、ということにたどり着き、これまでの「院内サロン」とは異なる取り組みに引き付けられました。その先駆者としてのがんサロンは、とても新鮮に映りました。

しかもタイミングよく、島根県益田市において「がんサロン支援塾」に関する研修(1泊2日の研修)が開催されることを知りました。事前情報もゼロに近く、知り合いも1人もいなくて、成果が得られるかわからない中で、清水の舞台から飛び降りる覚悟で参加することを決めました。

「がんサロン支援塾」納賀良一さんとの出会い

インターネットで申し込みをしてすぐに益田市在住の「がんサロン支援塾」リーダーの納賀良一さんという方から、電話がかかってきました。「あなたは何か、島根県に来たいの？目的は何ですか？」といった質問だったと記憶しています。初対面どころか、まだ会ったこともない相手にこのような質問を投げかけられ、私は一瞬怯みました。がんサロンでの「院内サロン」という特徴に疑問を感じている、この思いを私は必死に伝えました。納賀さんは「あっ、そう……」というような感じの受け答えでした。少し

間を置いて、島根県での取り組みを説明されました。納賀さんの、テンポの速い話しに圧倒され、胸の鼓動が止まらず、申し込みをしたものの、人を圧する様な迫力に、会うことのためらいを覚えました。

いよいよ納賀さんにお会いする日を迎えて、益田市に移動しました。到着したものの足の震えが止まらないままに、会場に入りました。まず、患者遺族のBさんが私に声をかけてくださいました。私の肩をポンとたたきながら、「遠いところよー来たねー」と、温かく笑顔で出迎えてくれました。Bさんのお陰で私の緊張感は幾分か解けました。

そして、納賀さんとの初対面です。納賀さんは溢れんばかりの笑顔で私を出迎えてくれました。後でわかったことですが、納賀さんは、私が九州からわざわざ来て何を学びたいのか。それに応えたかったとのことでした。挨拶を交わした後、研修会場の設営場面に直面しました。納賀さん自身もがんサバイバーなのですが、彼の指揮の執り方に、私は強いリーダー性を感じました。

納賀さんの「独立型がんサロン」

納賀さんが、がんサロンを立ち上げたのは2005年で、そのがんサロンの特徴は以下の3点です。

- ① 納賀方式のがんサロンは全国に先駆けて、「独立型がんサロン」と呼ばれるものであります。つまり、病院の外に設置を続けています。その特徴は、医療者側ではなく患者中心になることを構想しています。
- ② 「独立型がんサロン」は、がんサバイバーを1体として「7位1体」方式(2011年)が構想されています。それは地域内での社会資源とのネットワークを示すものです。尚、2015年には「11位1体」であり、2016年には「12位1体」にまで拡大しています。その「11位」とは次のものです。がんサロン、医療、行政、メディア、県議会議員、教育、産業(企業)、がん患者の住宅環境を考える建築家、宗教者、人生学、在宅医療(現在は12位として対話力が追加)。
- ③ 「がんサロン支援塾」は1年に1回開催されています。「がんサロン支援塾」に参加したときに、支援塾の会場には記者席が設けてあり、数社の新聞社が取材を行い、当日の様子は翌日の新聞に掲載されました。この島根県の「独立型がんサロン」の凄さはメディアの機能も取り込み広報活動を拡大していることにあります。

前述したリーダーシップについて付け加えると、納賀さんの行動は、同じがんを抱えるがんサバイバーにとって心強くもあり、悩みを打ち明けることができるピア的な存在であります。また、周りのがんサバイバーは、がんを抱えながらもがんサバイバー

のために活動し続けている納賀さんの背中に、いつしか自らを重ね合わせることもあります。納賀さんが患者のあるべき姿として「もの言う患者であるべし」と表現し、「がんサロン」に参加しているメンバーにも発言を勧めています。自分の意思を言葉や態度に表出することの重要性を指摘しています。

病気に罹患してしまうと自分のエネルギーを外へは向けず、内へ内へと放出しがちです。がんを抱えている納賀さんの活動はがんを生き抜く、まさに「サバイバー」そのものの生き方です。納賀さんの歩みはがん患者に勇気と希望を確信させるものであります。

さて、上述したようにがんサロンには、「院内がんサロン」「独立型がんサロン」があります。私は、がんサバイバーの視点から、「独立型がんサロン」の意義を強調したいのですが、ここでは、敬愛する実践家納賀さんの「方針」に依りつつ、主要な、興味深い提言を紹介し、末尾とします。

2016年8月に開催された講義「がんサロン 島根から広がった波～12位1体から得るもの～」に収められている「サロン開設、運営に当たって思うこと」からの文章の一部です。

開設について

- ・他県のサロンと島根県のがんサロンには、本質的な違いがあることからスタートすべき。
- ・メディアとの付き合いを大切に。
- ・開設の目的をはっきりとする(心のケアと医療情報の収集など)。
- ・自分自身を語る状況を作っておける(困ったこと・知りたいこと・伝えたいこと)。
- ・聞いてあげるための技法を学ぶ(傾聴手法)。

運営について

- ・がんサロンに参加するがんサバイバーには2種類のタイプがある。(サロンで多いに語る方、聞き役に回る方)。
- ・人を励ます行動は、自分はそれ以上でなければいけないことを知ること。
- ・人生を語るのが良い。
- ・他のサロンにも自由に参加できるのが良い。
- ・季節によりレクリエーション的な行事を多くしているサロンが多い。
- ・会場は1階ロビーが最高のステージ。

納賀さんありがとうございます。
いつまでもお元気で、
そして私たちを励まし
続けてください。



「西日本国際福祉機器展報告 おむつ検定を開催！」
NPO 福祉用具ネット理事 辻 奈美（おむつフitter 1級）

おむつはとても身近な福祉用具の1つです。スーパーやドラッグストア、福祉用具販売店など様々なところで販売されています。しかし、種類が多すぎて何を基準に選べばいいのか、選び方や使い方をだれに相談すればいいのか分からずに困っている方が多いと感じています。おむつの選定には、その人の体格やおむつの吸収量だけを考えれば良いわけではありません。吸収帯の厚みが股の部分で邪魔になり歩きにくくなります。座った時には陰部周辺を圧迫し座位姿勢を悪くしてしまいます。姿勢が悪いと食事動作や嚥下をし辛くします。呼吸もし辛く気持ちも沈みがちになります。つまり、おむつが原因でADLやQOLが低下してしまうのです。つまり、人の生活のあらゆる場面におむつが影響を与えているのです。そういったことを考えると、職種や業種の違いでおむつ交換に直接携わっていないからおむつについて知識や理解を深める必要がないとは言えないのです。

「おむつ検定」はおむつを選定し活用するための基本的な内容ではありますが、しかし、その基本的なことを学ぶと、おむつが単に選択や当て方といったテクニックだけではなく、その人の価値観や生活観も深く関連していること、その人をどう理解するかということの重要性に気づかされます。つまり自身のケアのあり方が変わります。かつての私自身がまさにそうでした。人を観る目が変わります。アセスメント力も飛躍します。そういった経験があるからこそ強く皆さんにおむつ検定やおむつフitterの受講をお勧めするのです。

たかがおむつではないことをみなさんもっと知って下さい！



「西日本国際福祉機器展報告 キネステ体験講座を開催！」
NPO 福祉用具ネット理事 海尾 美年子
（キネスティクス®ベーシックコース教師）

今年も皆さんにお伝えできたことの喜び！

今年は例年の体験講座、セミナーに加えて、NPO 福祉用具ネットブースの一角をお借りしてPRすることができました。本当に充実した時間をもつことができました。体験講座には43人と、今迄で最も多く参加していただきました。キネステが少しずつ広がってきていると感じる事ができました。

皆さんの感想からわかること！

体験講座終了後のアンケートの感想はいろいろですが、多くの方が、現場での自分の介助は、介助される人、介助する自分にとってどうなのかと感じる内容でした。今の自分の仕事を再確認されています。頭の中で考える事と実際に動いて感じることには大きな違いがあることを体験講座で体験してわかったのだと思います。これは、キネスティクス®のベースにある、自分の身体を通して（実際に動いてみて）感じて新たな気づきを得て、違った方法を学習していくことに繋がっていくのです。自分の動きの体験をたくさん積んで、今の自分の身体の動きのバリエーションを多くすることが、様々な身体状況の方への柔軟な対応を可能にしてくれます。体験講座はキネスティクス®の6つの概念のほんの一部です。興味のある方はどうぞベーシックコースを受講してみませんか。自分の身体の動きの理解が深まること間違いなしです。“我、動くゆえに我あり”とキネステ創始者は言っています。動かないと何も感じないし何も始まりません。キネスティクス®は本当に深い動きの学問です。



西日本国際福祉機器展スタンプラリーの報告

西日本国際福祉機器展の排泄ケア用品展示コーナーでは、今回スタンプラリーを開催しました。

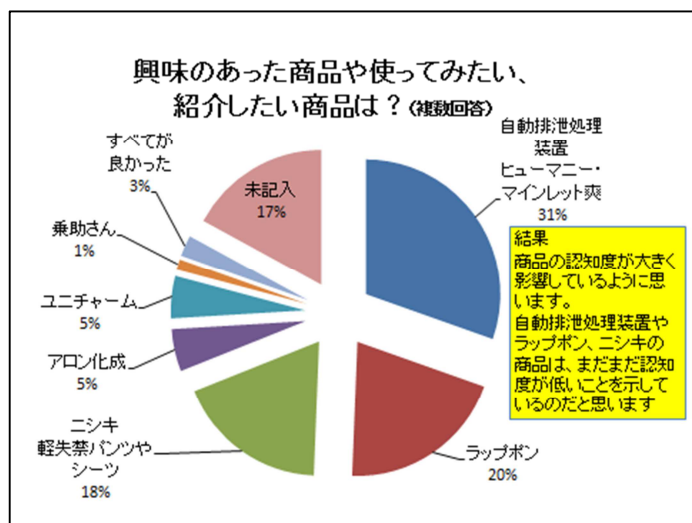
1日3回、11時・13時・15時

毎回、先着20人まで。合計180人

アンケートの回収は140名 回収率約78%

今回スタンプラリーを開催することで、多くの方に排泄ケア用品を紹介することができました。

そのアンケート結果で特に反響のあった排泄ケア用品は、認知度が低い、つまり、良く知らない排泄ケア用品でした。



自動排泄処理装置は知らない人が多く、今回一番注目された。ヒューマニーは5台展示してアピールしました。知ること！



マインレット爽は体験することで思ったほど違和感がなかったと気付いてくれたようです。体験してわかることがたくさんあります。体験！

ニシキの布製のおむつや軽失禁用下着、消臭機能シートなども注目されました。説明を聞いて分かることもあります。傾聴！



第18回西日本国際福祉機器展来場者数

24日1日目 6,264人

25日2日目 6,644人

26日3日目 6,995人 **合計 19,903人**

(昨年の実績 21,003人)

事務局だより

《28年10月から12月までの事務局のうごき》

9月の続き

9月20日 開発プロジェクト会議(北九州市)

9月21日 開発会議(飯塚市2件)

9月25日 休日出勤 研修会打合せ

10月

西日本国際福祉機器展準備

10月5日 開発会議(飯塚市)

10月6日 西日本展示ガイドブック原稿提出

10月9日 九州安寿会主催排泄ケア研修会 in 鹿児島

10月12日~14日 東京国際福祉機器展

10月17日~18日 開発相談(東京都)

10月20日 看護学部大学院生への特別講義

10月24日 福祉用具研究会

10月25日 展示会装飾打合せ

10月28日 開発会議(福岡市)

10月29日 メンタルヘルスケア研修会2回目

11月

11月1日~2日 開発相談(東京都)

11月4日 開発相談(事務局)

11月8日 施設検証(飯塚市)

11月9日 開発プロジェクト会議(北九州市)

11月11日 開発相談(福岡市)

11月15日 開発相談(事務局)

11月21日 福祉用具研究会 開発相談(事務局)

11月23日 展示会場設営

11月24日~26日 西日本国際福祉機器展

12月

12月1日 事例相談

12月2日 開発会議 飯塚市

12月3日 キネステ体験講座

12月3日 NPO福祉用具ネット忘年会 源じいの森

12月20日 九州安寿会主催排泄ケア研修会 in 熊本

12月22日 第9回福祉用具研究会

12月23日 動作介助技術勉強会

ささえ58号校正・印刷・発送準備

《今後の予定1月から3月まで》

1月25日 九州安寿会主催排泄ケア研修会 in 長崎

2月3日 九州安寿会主催排泄ケア研修 in 佐賀

2月18日・19日 キネステベーシックコース研修会

3月4日 キネステベーシックコース研修会